

こ う う ん

よ

幸運を呼ぶ チャンス



げんさく

原作：ミツ ガリィ

か

た ば た

みつ え

書き替え：田畑サンドーム光恵

はなし さくしゃ

このお話の作者ミツさんは、ニュージーランドのオークランド

す

に ほん じん

す て き

し ん し

に住んでいる日本人の素敵な紳士です。

つか

ぞん じ

使ったイラストはご存知、「いらすとや」さんからです。

幸運を呼ぶチャンス

あなたは、運を信じますか。運というのは、「人の力と関係なく、幸せなことや悪いことが起こる」という意味です。幸せなことが起こるのが幸運で、悪いことが起こるのが悪運です。

人は人生で、「世界運管理協会」に三回「幸運をください」と頼むことができます。これを「幸運を呼ぶチャンス」と言います。この三回のチャンスは、15才から使えます。このチャンスを使うためには、「世界運管理協会」に申請書を出さなければいけません。申請書には、「〇〇から、私に幸運をください」と書きます。「世界運管理協会」は、世界中の人の運を管理しているグループです。

私は、38歳までに「幸運を呼ぶチャンス」を三回とも全部使ってしまいました。

一回目のチャンスは、高校三年生の18歳の時に使いました。私は大学でウイルスのことを勉強したかったので、ウイルスの研究で有名なXX大学に行きたいと思いました。XX大学の入学試験は2月にあります。私は前の年の8月ごろに、「XX大学の入学試験に通りたいから、私に幸運をください」と書いた申請書を持って、「世界運管理協会」に行きました。すると次の週に、近くの研究所で働いているAさんが私の家に来ました。そして、私にこう言いました。「あなたは、XX大学でウイルスの勉強をしたいそうですね。私はXX大学でウイルスの勉強をしまし

た。そして、今^{いま}近^{ちか}くの研^{けん}究^{きゅう}所^{しょ}で働^{はたら}いています。よかつたら、私^{わたし}が入学^{にゅうがく}試験^{しけん}の勉^{べん}強^{きょう}を手^て伝^{つた}いますよ。」

私^{わたし}は「どうしてAさんは私^{わたし}がXX大学^{だいがく}に行^いきたいことを知^しっているんだろ
うか」と不思議^{ふしぎ}に思^{おも}いました。でも、入^{にゅう}学^{がく}試験^{しけん}までもう6か月しかありま
せん。私^{わたし}はとても焦^{あせ}っていました。だから、Aさんに、「それでは、6か月
いっしょうけんめい^{べんきょう}一^{おし}生^{こた}懸^{けん}命^{めい}勉^{べん}強^{きょう}しますので教^{おし}えてくださ^{こた}い。」と答^{こた}えました。

さて、XX大学^{だいがく}の入^{にゅう}学^{がく}試験^{しけん}の日^ひが来^きました。そして、数^{すう}学^{がく}のテス^はトが始^{はじ}ま
りました。私^{わたし}は数^{すう}学^{がく}が苦^{にが}手^てです。問^{もん}題^{だい}は5つありましたが、そのうちの一^{ひと}
つが、Aさん^{おし}に教^{おし}えてもら^{もん}った問^{もん}題^{だい}にとて^にもよ^{わたし}く似^にていま^{わたし}した。私^{わたし}は、そ
の問^{もん}題^{だい}がよ^{でき}く出^で来た^{じしん}ので、自^じ信^{しん}が出^でて他^{ほか}の問^{もん}題^{だい}もよ^{でき}く出^で来^きました。そして、
私^{わたし}はXX大学^{だいがく}の入^{にゅう}学^{がく}試験^{しけん}に受^うかりました。

その時^{とき}私^{わたし}は思^{おも}いました。「Aさん^{わたし}は、私^{わたし}が『幸^{こう}運^{うん}を呼^よぶチヤンス』を使^{つか}
ったから、『世^せ界^{かい}運^{うん}管^{かん}理^り協^{きょう}会^{かい}』が送^{おく}った人^{ひと}なのかな。」私^{わたし}にははっき^{わたし}
りとはわ^{こう}かりま^{うん}せんでした。でも、『幸^{こう}運^{うん}を呼^よぶチヤンス』のおか^よげで、Aさ
ん^きが来^{わたし}て私^{わたし}を助^{たす}けてく^じづ^{ぶん}て、自^じ分^{ぶん}が頑^{がん}張^ばるこ^{こう}とが^{うん}できた^{うん}のが幸^{こう}運^{うん}なんだと
思^{おも}いました。

XX大学^{だいがく}に入^{はい}った私^{わたし}は、一^{いっ}生^{しょう}懸^{けん}命^{めい}ウイ^{べん}ルス^{きょう}の勉^{べん}強^{きょう}をし^{とし}ました。ある年^{とし}、
とて^こも怖^こいウイ^びルス^{ょう}の病^せ気^{かい}が世^せ界^{かい}中^{じゅう}に広^{ひろ}がりました。そのウイ^きルスに効^き
くワクチ^せンを世^せ界^{かい}中^{じゅう}の大学^{だいがく}が研^{けん}究^{きゅう}し始^{はじ}め^{だいがく}ました。XX大学^{だいがく}も、みん^{だいがく}な^{だいがく}で
いいワクチ^{つく}ンを作^どろうと努^{りょく}力^{りょく}していま^{りょく}した。

私^{わたし}も、「世^せ界^{かい}の人^{ひと}を助^{たす}けるた^きめに、そのウイ^きルスに効^きくワクチ^{つく}んを作^{つく}り

まいにちべんきょう つづ わたし さい
たい！」と毎日勉強を続けていました。でも、私もう27歳になっ
ていました。まだガールフレンドがいません。毎年クリスマスイブを一人で寂し
く過ごしていました。そこで、二回目の「幸運を呼ぶチャンス」を使うこと
にしました。「今年のクリスマスイブはガールフレンドと過ごしたいから、私
に幸運をください」と書いた申請書を「世界運管理協会」に持って行き
ました。

がつ だいがく おな けんきゅうしつ とも うみ
12月になって、大学の同じ研究室の友だちが「クリスマスイブに、海
の見えるホテルでパーティがあるんだって。みんなで行こうよ！」と言いまし
た。私も面白そうなので行くことにしました。

よる じ ちか みなと はなび はじ とき
パーティの夜の8時に、近くの港から花火があがり始めました。その時、
友だちが、「君は沖縄の出身だったよね。あの右から二番目の窓から花
火を見ている女の人も沖縄の出身だって言ってたから、話してみ
たら？」と言いました。

わたし おきなわ しゅっしん ひと き うれ
私は、同じ沖縄の出身の人がいると聞いてとても嬉しくなりました。
そこで、その友達の言う通りに、右から二番目の窓の所に行きました。
そこには、とても優しそうな綺麗な女の一人が立っていました。私は
その女の人に、「すみません。ご出身は沖縄なんですか」と聞きました。
すると、その女の方は、「そうなんです。あなたも、沖縄のご出身で
すか」と答えました。

わたし おんな ひと はなし しゅっしん ち おな しゅみ
私とその女の方はとても話があいました。出身地が同じで、趣味も
同じで、年も同じでした。私たちは、すぐに恋に落ちました。私は、「こ
れはもしかしたら、二回目の『幸運を呼ぶチャンス』のおかげかな??？」

おも
と思いました。クリスマス伊ブに、夜空には花火があがっていて、こんなに
すてき おんな ひと で あほんとう こううんとき わたし
素敵な女の人に出会えた。本当に幸運でした。でも、この時も私には、
こううん こううん よつか
その幸運が「幸運を呼ぶチャンス」を使ったからなのかどうかは、はっきり
とはわかりませんでした。

わたし こううん たいせつおもじぶん
私はこの幸運を大切にしなくちゃいけないと思いました。そして、自分
どりよく しゅうまつ じかん つくかのじょ
でも努力をしました。週末は、時間を作ってよく彼女とデートをしまし
たんじょうび わすかのじょ びょうき とき
た。誕生日にもいつもプレゼントを忘れませんでした。彼女が病気の時
いっしょうけんめいかんびょうかのじょ わたし しん
は、一生懸命看病しました。彼女は、私のことを信じてくれるように
なりました。そして、私たちは結婚しました。結婚してからも、私は彼女
わたし けっこん けっこん わたし かのじょ
（今では私の妻）への思いやりを忘れないようにしました。可愛い娘も
いま わたし つま おも わすかわい むすめ
ひとりう わたし しあわ
一人生まれて、私たちはとても幸せでした。

たいへん お
しかし大変なことが起こりました！

わたし ひ だいがく けんきゅうしつ いまんいでんしゃの
私はその日も、大学の研究室に行くために満員電車に乗っていまし
でんしゃ なか おんな ひと おお こえ わたし ゆび い
た。その電車の中で、ある女の人が大きな声で、私を指さしてこう言
ひと ちかん わたし しり さわでんしゃ つぎ えき
ました。「この人、痴漢です！私のお尻を触りました！」電車が次の駅に
つ でんしゃのなんにんひと わたし つ
着くと、電車に乗っていた何人かの人が、私をプラットフォームへ連れて
い おんな ひと でんしゃで えきいん わたし うで
行きました。女の人も電車から出てきました。そこで、駅員が私の腕を
わたし けいさつ つ い けいさつ わたし ちかん
つかみました。そして、私を警察に連れて行きました。警察で私は「痴漢
おんな ひと しり さわ わたし なに
じゃないです！その女の人のお尻を触っていません。私は何もしていま
なんかい い けいさつ しん わたし
せん！」と何回も言いました。でも、警察は信じてくれませんでした。私
ひ いえ かえ
はその日から家に帰ることができませんでした。

つぎ つき わたし さいばんさいばん わたし ちかん
次の月に私の裁判をすることになりました。裁判でも「私は痴漢で

はありません。何も悪いことはしていません。」と言おうと思いました。でも、裁判官は私の言うことを信じてくれるでしょうか。とても心配でした。そこで、私は3回目の「幸運を呼ぶチャンス」を使おうと思いました。そして、「こんど私の裁判がありますから、私に幸運をください」と申請書に書いて、妻にその申請書を「世界運管理協会」に持って行ってもらいました。

裁判の日が来ました。「私は痴漢ではありません。何も悪いことはしていません。」と何回も私は言いました。でも、裁判官も検察官も、私の話を信じません。その時、私の弁護人が、「証人がいます」と言いました。私は、「証人??一体、それは誰?」と思いました。

証人は10代の女の子Bさんでした。Bさんは、こう言いました。

「私は、被害者(「私がお尻を触った」と言っている女の人)がよく見えるところに座っていました。被害者の横に、おばさんが大きなバッグを持って立っていました。そのバッグの中に子犬がいたんです。その子犬は、何回も被害者のおしりに顔をくっつけていました。被害者が痴漢だと思ったのは、その子犬です。」

裁判官はBさんに聞きました。

裁判官:「どうしてすぐに警察に行って、子犬の話をしなかったんですか。」

Bさん:「大騒ぎになったので、警察に行くのが怖かったです。でも、父にこの話をしたら、父は『本当のことを話さなくちゃいけない』

い しょうげん おも
と言いました。だから、証言しようと思いました。」

けっきょく さいばんかん わたし ち かん しん わたし いえ
結局、裁判官は私が痴漢ではないことを信じてくれました。私は家
かえ ひさ いえ かえ ほんとう うれ
に帰ることができました。久しぶりに家に帰って本当に嬉しかったです。
ゆう き だ しょうげん ころ かんしゃ
そして、勇気を出して証言をしてくれたBさんに心から感謝しました。

おも かいめ こううん
でも、またふと思いました。「もしかしたら。。。3回目の『幸運を呼ぶ
けい む しょ い とき わたし
チャンス』のおかげで、刑務所に行かずにすんだのかな？？？」その時も私
い っ た い こううん よ なに
にははっきりわかりませんでした。「一体、『幸運を呼ぶチャンス』って何？
せ かい うん かん り きょう かい なに
『世界運管理協会』って何？」

わたし こた み けんさく
私はその答えを見つけるために、インターネットで検索しました。でも、
せ かい うん かん り きょう かい こ せ かい うん かん り きょう かい
「世界運管理協会」と打ち込むこともできません。「世界運管理協会」
ぜんぜん わたし おも
がどんなグループか全然わかりません。そして、私は思いつきました。「こ
よ つか わたし ひと
れは『幸運を呼ぶチャンス』を使うしかない！でも、私にはチャンスが一つ
のこ
も残ってない。。。」

わたし し かつ けい じ ばん だれ わたし こううん
そこで私は、仕方なくインターネットの掲示板に、「誰か私に『幸運
よ か こ
を呼ぶチャンス』をください」と書き込みました。するとあるおばあさんがE
メールをくれて、

わたし こううん よ ひと
「私の『幸運を呼ぶチャンス』を一つあげましょう。ただし、あなたが
こううん よ つか り ゆう わたし き い
『幸運を呼ぶチャンス』を使う理由を私が気に入ったらね。」

たか びょういん わたし びょういん い
おばあさんは、とても高そうな病院にいました。私はその病院に行っ
わたし こううん よ はな
て、どうして私がおばあさんの「幸運を呼ぶチャンス」がほしいかを話
しました。

わたし じんせい かいおお こううん めぐ とき こううん
「私は人生で、3回大きな幸運に恵まれました。その時いつも『幸運を
よ つか ほんとう こううん よ
呼ぶチャンス』を使いました。でも、本当に『幸運を呼ぶチャンス』のおかげで私にその3つの幸運が来たのかどうかわかりません。だから、『世界運
わたし こううん き せ かいうん
管理協会』がどんなグループなのかを調べたいんです。」

りゆう おもしろ わたし こう
おばあさんは、「その理由はとても面白いわね。いいでしょう。私の『幸
うん よ ひと しら
運を呼ぶチャンス』を一つあげましょう！それで、調べてください。」

こううん よ わたし せ かいうん
おばあさんの『幸運を呼ぶチャンス』をもらって、ついに私は、「世界運
かん り きょうかい しんせいしょ だ せ かいうんかん り きょうかい
管理協会」に申請書を出しました。「『世界運管理協会』がどんなグ
し わたし こううん か
ループか知りたいから、私に幸運をください」と書きました。

いっ げつ ま ひ わたし いえ まえ おお くろ くるま と
一か月待ちました。ある日、私の家の前に大きな黒い車が止まりました。
なか せ たか おとこ ひと で かれ わたし せ かいうんかん
た。中から背の高い男の人が出てきました。彼は、「私は、『世界運管
り きょうかい き くるま なか はい い
理協会』から来ました。どうぞ、車の中に入ってください」と言いまし
わたし くるま なか はい おとこ ひと
た。私は、ドキドキしながら車の中に入りました。そして、その男の人
はなし き
の話 を聞きました。

き はなし くに
「よく聞いてください。この話はこの国のトップ・シークレットです。もし
ほか ひと はな わたし かぞく ころ
あなたが他の人に話したら、私たちはあなたもあなたの家族も殺します。
いいですね。」

こううん よ わたし
それから、あなたに『幸運を呼ぶチャンス』をくれたおばあさんには、私
れんらく はな だいじょうぶ
たちから連絡をしました。だから、あなたから話さなくても大丈夫です。

せ かいうんかん り きょうかい かんが
『世界運管理協会』というのは、AIが考えたプログラムです。みんな、

こううん　ひと　おも　ま　ちが
幸運がほしい人のためのプログラムだと思っていますが、それは間違っ
ます。実は、人を幸運にしたい、人を助けたい、と思う人のためのプロ
ラムなんです。つまり、人の心の中にある『他の人を幸せにしたい、他
の人を助けたいという気持ち』を満たすためのプログラムなんです。とい
うのは、心理学の研究でわかっていますが、人間が一番の幸せを感じる
のは、他の人を幸せにした時、他の人を助けた時なんです。だから、幸
運というのは、他の人に幸運をあげた時なんですよ。

このプログラムでは、悪意のある願いや、法律に違反するリクエスト、そ
して、申請書を出す人が自分では絶対実現できるはずがない希望は受け
つけません。

ぐ　たい　て　き　ふ　う　う　ご
具体的にこのプログラムはこんな風に動きます。

だれかが『〇〇から、私に幸運をください』と『世界運管理協会』に
申請書を出す。AIが、その人を助けることができる人を探して、『その
人を助けてあげたい』と考えるように誘導をする。

どうですか、わかりましたか？」

「ああ、そうか、受験の時に勉強をしてくれたAさんも、クリスマス
イブに行こうと言った大学の研究所の友だちも、裁判で証言してくれ
たBさんも、AIが探してくれた人なのか」と私は思いました。そして、私
は『世界運管理協会』から来たその背の高い男の人に聞きました。

「つまり、私が幸運だと思っていた時、Aさん、大学の研究所の友
だち、Bさんも、幸運だと思っていたんですか。」

かれ こた ひと も
彼は答えました。「そうです。『人を助けるチャンスを持つということが
ほんとう こううん ひと すば ひと すば
本当の幸運』なんです。人って素晴らしいですね。そして、もう一つ素晴
らしいことは、あなたのように、人が助けてくれたことに感謝して、今度は
じぶん どりよく ひと かんが たす かんしゃ こんど
自分が努力してまわりの人のことを考えて、助けたいと思う人がいるこ
とです。

いま まいにち どりよく き けんきゅう
あなたは今、毎日努力して、ウイルスに効くワクチンを研究していま
す。いいワクチンをつくることができ、そのワクチンが世界の何億もの人を
たす ひ き じぶん さいこう こううん かん
助ける日が来たら、あなたは自分が最高に幸運だと感じるでしょう。そし
て、あなたのワクチンで助かった人たちは、あなたからもらった幸運に感謝
たす ひと ひと ひと とううん かんしゃ
して、もっと多くの人を助けていきます。そうやって、人々の幸運は続い
ていく、つまり人と人は助け合って生き続けていくんです。」

あと かれ くるま しず はし だ ゆうやみ なか き み
その後、彼の車は静かに走り出しました。そして、夕闇の中に消えて見
えなくなりました。

わたし ちい あかり み き
でも、私には小さな灯が見えたような気がしました。それは、これから
つづ きぼう こううん あかり おも
ずっと続いていく、希望の、幸運の灯だったのだと思います。

はなし
(このお話はフィクションです。)